■特集：公開シンポジウム　－新しい奄美世界の創出(2)－

アイデンティティと歴史認識

前利　潔（プロジェクトメンバー）

はじめに

公開シンポジウムのあと，沖縄タイムスに『新薩摩学』（南方新社）の書評を頼まれた。同書は，鹿児島純心女子大学国際文化研究センターが開催した「奄美群島日本復帰50周年記念」シンポジウムをもとに編集されている。『奄美と開発』(同)と同時期に出版された本である。『新薩摩学』というタイトルが気になったが，「薩摩」「奄美」「琉球」という枠組みを乗り越えた歴史認識が必要であるという議論が主軸となっており，興味深く読むことができた。枠組みを乗り越えた歴史認識ということに，異論はない。

しかし，私の関心は，同シンポジウムで問題提起はされながらも，議論が深められなかったテーマにある。アイデンティティの問題から考えると，枠組みの外し方には，危うさもつきまとうのではないかという問題提起である。たとえば，沖縄を版図に取り込もうとした柳田民俗学の「植民地主義的」性格の問題も指摘されている。

同書によると，琉球，薩摩へのサツマイモの伝来は，薩摩とルソンとの交易関係を抜きにしては語ることはできない。また，これまで「薩摩」との関係で語られてきた「奄美」の一字姓も，東アジアの冊封体制の中に位置づけることによって，その本質が見えてくる。考古学については，古墳文化研究を例に，現在の国境というものを乗り越えて，朝鮮半島と北部九州との人や文化の交流という視点が不可欠なことが指摘されている。たしかに，枠組みを乗り越えた歴史認識は必要である。

奄美諸島出身(ルーツ)の作家の小説からは，「薩摩」「奄美」「琉球」という三極の中で揺れ動く，複雑なアイデンティティがみえてくる。沖永良部島生まれ，鹿児島育ちの一色次郎（「青幻記」／太宰治賞受賞作）は，「薩摩」「奄美」「琉球」の三極で宙吊りになっている。沖永良部二世（東京生れ）の干刈あがた（「入江の宴」／芥川賞候補作）は，父母の生まれた島，さらには「琉球」にもつながろうとする。喜界島生まれの安岡伸好（「地の骨」／直木賞候補作）は，「薩摩」への怨念の姿勢を崩さない。大島生れの安達征一郎（「祭りの海」／直木賞候補作を含む）は，糸満漁夫の回遊魚的な行動力を通して，北緯三十度以南（国境）が米国の占領下に置かれたことに抗おうとする。文学からみると，「薩摩」「奄美」「琉球」という枠組みを乗り越えることは簡単なことではない。(干刈あがたについては，シンポジウムにおける本山謙二の報告がある)

歴史認識は，アイデンティティと深く結びついている。しかし，重なりあうとは限らない。いまでも，「日本」「朝鮮」「中国」の三極の間では，歴史認識をめぐって対立が続いている。その背景にはアイデンティティの対立がある。アイデンティティの対立が，枠組みを乗り越えた歴史認識の妨げとなっている。『新薩摩学』の書評を書きながら考えていたことは，和泊シンポジウムの第一部の討論会「歴史・文化・アイデンティティを奄美から考える」を，アイデンティティの問題からとらえ直してみたいということであった。

考古学，地名とアイデンティティ

新里貴之は，「奄美諸島の考古学研究からみたアイデンティティ」をテーマに報告。対象となる時代は，日本史の時代区分では，弥生

時代から中世の時代に相当する。沖縄史の時代区分では，「貝塚時代後期」といわれている。当時の琉球列島の姿は未解明な部分が多いが，琉球弧の歴史研究では注目を浴びている分野でもある。「薩摩」「奄美」「琉球」という枠組みが形成される以前の時代である。

新里によると，この時代の研究は木下尚子(熊本大学教授)による「南島貝交易」論が主軸となっている。「貝」というモノの動きから，当時の琉球弧の島々に住む人々の躍動的な姿が浮かんでくる。南島産貝をもとめて，日本・朝鮮・中国の人々が琉球列島を訪れた。弥生時代から古墳時代にかけて，沖縄諸島地域を主な生息地とするゴホウラ・イモガイなどが，西北九州地域に運ばれ，首長層の象徴的アイテムとして用いられていた。当初，原貝のまま運搬されていたゴホウラ・イモガイは，弥生時代中期頃から，沖縄諸島を中心に粗加工されたうえで，消費地に運ばれるようになっていた。土器の動きから，奄美諸島の人々が，南島貝交易の仲介者集団としての役割を果たしていたことが想定される。木下によれば，弥生時代前半まで貝交易の運搬人は「西北九州弥生人」たちが担っていたが，やがて島の海人たちに受け継がれたという。

弥生時代中期後半頃から，青銅器などの価値が高まり，それまでの南島貝交易は衰退期をむかえるが，古代並行期になると，ヤコウガイ交易として復活する。6～10世紀頃の奄美諸島を中心に，ヤコウガイ大量出土遺跡があいついで発見されている。ヤコウガイは螺鈿製品の材料として使われていたと想定され，螺鈿技術をもっていた中国との貝交易というかたちで始まるが，やがて螺鈿国産化をめざすヤマト人たちも，ヤコウガイをもとめて琉球列島を訪れるようになった。琉球列島を供給地として，中国・朝鮮・日本を結ぶ南島貝交易ネットワークが形成されていたのである。

南島貝交易に伴って，日本列島から琉球列島へ土器の動きがみられたが，11世紀の段階になると，徳之島を生産拠点としたカムゥヤキ交易圏が，琉球列島とほぼ重なるかたちで形成された。カムィヤキの時代は，14世紀前半頃まで続いたと思われる。

以上は，新里の報告を，木下が沖縄タイムスに書いた「貝交易（上）（下）」（04年11月1，8日）を参考にまとめたものである。弥生時代から中世に至るまでの時代，琉球列島の人々が，海を舞台にして，中国・朝鮮・日本との交易を活発に行っていた姿が思い浮かんでくる。

ところで，この時代の琉球列島の姿について，琉球史のテキストともいえる高良倉吉著『琉球王国』（1993年）では，次のように記述されている。

> ヤマト社会が弥生時代から古墳時代，律令制国家の時代へと急激に変動していった頃，沖縄に住む人々は海岸に近い低地に居住し，珊瑚礁海域の浅いラグーン（礁湖）で貝を拾い，魚を捕獲する生活をおくっていた。おそらく，眠ったように静かな日々が，南の島々でいとなまれていたのであろう。(傍点筆者)

この時代が外界から隔絶された社会だった，という意味ではない。高良は考古学の成果や，当時の日本や中国の文献史料から，「沖縄」と日本，中国との交流があったのは事実だと述べている。しかし，海外諸地域との交流は「恒常的なものではなく，偶発的なものであった」と理解すべきだとしたうえで，繰り返し「南の島々の住民は，ラグーンで貝や魚を採集する静かな生活の日々を送っていたと考えるべきだ」と強調している。

しかし，南島貝交易という視点からみると，当時の琉球列島と日本，中国の交流は「恒常的」なものになっていたようにも思える。このような歴史記述の違いは，どこに記述の力点をおくかという問題ともからんでくる。それは，「琉

球王国」をめぐるアイデンティティの問題が背景にあるといってよい。高良の上記の文章は，「考古学者がグスク時代とよぶ革新的な時代」の前史的描写として，記述されている。琉球列島の歴史は，12世紀からはじまるグスク時代の到来によって，動的な歴史時代をむかえたというのが「通説」である。

いま「奄美」側の研究者から，奄美大島を中心に発見されているヤコウガイ大量出土遺跡，徳之島におけるカムィヤキ古窯跡群の発見などを，「琉球王国論」に収斂させてしまう沖縄の研究者の歴史記述に対して，異議申し立てが行われている。「琉球王国」に対置するかたちで，奄美大島，あるいは徳之島を中心に，国家形成の萌芽があった可能性を指摘している。

新里は，「近年の奄美・沖縄の研究者の論文は，研究者同士の琉球王国論と日本古代・中世国家論のイデオロギーの対立にも読み取られかねない」と述べているが，「琉球王国論」をめぐるアイデンティティの対立といってもいいだろう。新里は，物質文化の分布や動きなどの背後に何らかの構造を読み取るという作業が，モノ以外に資料がない「先史時代の考古学研究」のあり方として述べるともに，「解釈の段階において研究者のアイデンティティというフィルターに通される」場合もあることを指摘する。考古学研究は，自ら語ることができないモノが対象であるからこそ，「解釈の段階において研究者のアイデンティティというフィルター」を通ることは避けられないことだと思う。あるいは，歴史研究一般において，研究者のアイデンティティの問題を無視することはできない。そのことを肯定するというよりも，「アイデンティティと歴史認識」は切り離すことができないということを自覚したうえで，「無文字時代にも適用できる理論や資料操作を，考古学資料という同じ土俵で研究成果をぶつけ合うこと」（新里）が必要だと思う。

「アイデンティティと歴史認識」について，脱線的に考えてみたい。いまでは捏造だったことが明らかになっているが，50万年前の「秩父原人」の住居跡が「発見」されたとき，「逆説の日本史」を週刊誌に連載している作家の井沢元彦が，同誌に「秩父原人はハイテク日本のルーツ」という記事を書いた。「秩父原人」には私も騙された一人だが，井沢の「秩父原人はハイテク日本のルーツ」という記事には，さすがに驚いた。「秩父原人」が現在の日本人のルーツであるかのような文章であった。50万年前といえば，いまのかたちの日本列島はなく，大陸とつながっていた時代である。そもそも，現生人類（ホモ・サピエンス）も登場していない時代だ。しかし，捏造が明らかになるまでこの記事は，多くの読者に共感をもって受け止められたのではないか。井沢の歴史記述には，＜日本人＞というアイデンティティが色濃く投影されていることを，「逆説」的に示した記事であった。

「秩父原人」と＜日本人＞を結びつけることにはさすがに違和感をもったが，「縄文時代の日本」「弥生時代の日本」という表現には違和感をもたない自分自身に気がつく。網野善彦は著書『「日本」とは何か』（2000年）の中で，「日本の旧石器時代」「縄文時代の日本」「弥生時代の日本人」という表現に疑問を投げかけている。網野は「日本人」という語は，「日本国の国制の下にある人間集団をさす言葉であり，この言葉の意味はそれ以上でも以下でもない」と指摘する。そして，「日本人」が姿を見せるのは，ヤマトの支配者たち，「壬申の乱」に勝利した天武の朝廷が，「倭国」から「日本国」に国名を変えたときであった，という。7世紀末から8世紀初頭の頃のことである。また，「日本国の成立・出現以前には，日本も日本人も存在せず，その国制の外にある人々は日本人ではない」「江戸時代までは日本人でなかったアイヌ・琉球人は，明治政府によって強制的に日本人にされた」と述べる。

ヤマトの支配者たちが，国名を「倭国」から「日本国」へ変えた時代の琉球列島とヤマトの

関係について，木下の「貝交易」の記述が興味深いので，紹介する。ヤマト社会が律令国家形成にむけて大きく方向転換した７世紀前半，長かった琉球列島とヤマト社会との貝交易に終止符が打たれた。『日本書紀』や『続日本紀』には７世紀から８世紀にかけて，飛鳥や平城の宮都に登場した琉球列島人の記事が島の名前とともに頻繁に出てくる。貝交易再開にむけた琉球列島人の，直訴行為ではないか。同じ頃，琉球列島と中国唐との間で，ヤコウガイ交易が始まる。螺鈿国産化をめざすヤマト人がヤコウガイをもとめて琉球列島を再び訪れるのは，９世紀になってからである。木下尚子と，高良倉吉のこの時代の歴史記述の違いが気になる。歴史記述は，研究者のアイデンティティから逃れることはできないのではないか。

本稿は，「奄美」「沖縄」「南西諸島」「奄美諸島」「沖縄諸島」「琉球諸島」などの言葉の使い方でとまどいながら書いている。ここでは，「沖縄」は「沖縄諸島」「宮古諸島」「八重山諸島」を総称する言葉として，カッコ付きの「奄美」は「奄美諸島」を意味する言葉として使っている。あとで述べるように，＜沖永良部人＞の私にとっては，「奄美」という言葉の使い方にはとまどいがある。「南西諸島」は，「薩南諸島」「奄美諸島」「沖縄諸島」「宮古諸島」「八重山諸島」を総称する言葉として使っている。「薩南諸島」には「奄美諸島」も含まれているみたいだが，個人的には抵抗がある。「奄美諸島」「沖縄諸島」「宮古諸島」「八重山諸島」を総称して「琉球列島」と使っている。地名等の呼称の問題も，アイデンティティとからんで，難しい。復帰運動の過程では現実的な問題として議論され，そしていまでもマスコミの表記の仕方には混乱がみられる。

一昨年，「琉球諸島」が世界自然遺産登録の推薦候補にリストアップされていると報じられたとき，各紙の名称の使い方が気になった。「琉球諸島（鹿児島，沖縄）」（朝日新聞），「トカラ列島以南の南西諸島（鹿児島，沖縄）」（南日本新聞），「奄美群島を含む琉球諸島（鹿児島県，沖縄県）」（南海日日新聞），「トカラ列島以南の琉球諸島（鹿児島，沖縄）」（琉球新報），という表記であった。全国紙，地方紙という立場に規定されて，「南西諸島」「琉球諸島」「奄美群島」という名称が使われているのがわかる。南日本新聞は，「世界遺産委員会への申請の際は『琉球諸島』の呼称を使う方向で検討することになった」という説明記事を書きながらも，「南西諸島」という表記にあくまでもこだわっている。

毎日新聞鹿児島支局の記者が書いた記事で，この問題の背景を理解できた。世界自然遺産に関する検討会は当初，「南西諸島」という呼称を使っていたが，①南西諸島は種子島・屋久島を含むこと，②世界では南西諸島では通用しないなどの理由から，結局生物学的な区分に基づき「琉球諸島」という名称に変更したという。鹿児島県環境保護課の「これでは，沖縄だけを指すと誤解されかねない。何とかして名称に『奄美・トカラ』と入れるようアピールしたい」というコメントも紹介している。

「南西諸島」と「琉球諸島」という名称は，奄美諸島の人々のアイデンティティにとっても複雑な問題である。米国による占領下にあった1946年10月，軍政府の指令によって，大島支庁は「臨時北部南西諸島政庁」という名称に変更された。しかし，英文の原文は「Provisional Government Northern Ryukyu」であった。直訳すると，「北部琉球臨時政庁」となるが，「奄美」側が「北部琉球」という表記を拒否した結果，日本語の表記では「北部南西諸島」となったのである。「奄美」の人々は，復帰運動の過程で，「琉球諸島」の中に「奄美諸島」は含まれないという歴史認識も声高に主張していた。

奄美諸島の内部に目を向けると，各島々では「奄美」という名称の受けとめ方に差異がある。島尾敏雄は，エッセイ「奄美の呼び方」（1959年）の中で，「沖永良部島や与論島で，自分の島が奄美と呼ばれていることを知った

のは，やっと昭和にはいってからだ」と書いている。いまでも沖永良部と与論の人々が使う「奄美」という言葉は，「奄美大島」のことを指すことが多い。大島新聞の斉藤美穂記者（千葉県出身）は，本社（名瀬）勤務から沖永良部支局勤務に移ったときの感想記事で，沖永良部や与論の人々が世代に関係なく，「奄美とはちがってエラブ（あるいはヨロン）では・・・」という表現がポンポンと飛び出してくることに，当初はとまどったことを書いている。そして，「奄美」が「『奄美大島』を単に短縮させているだけと考えれば，何も驚くことはない」と気がついたという。私も文章で奄美諸島全域を意味する場合は，カッコ付きの「奄美」と表現している。それでもしっくりこないが。

島尾敏雄は，上記の文章に続いて，「それぞれの島はそれぞれキカイであり，トクノシマであり，エラブ，またヨロンであって，観念的にはアマミの中の一つだと理解しても，島々のあいだに差異が多く，何となく実感としてぴたりとこないふうだ」と書いている。いまでもこの文章の意味は，通用する。島尾は「奄美」や「沖縄（琉球）」の島々に住む人々が，地名等の名称にもつ複雑な感情に気づいたからこそ，「奄美」と「沖縄」を包括する言葉として「琉球弧」という言葉を使いはじめたのである。

このように奄美諸島の各島々に住む人々のアイデンティティは，複雑である。話をもとにもどそう。新里は，「奄美」側の研究者である高梨修（奄美博物館）が提起する「中世までに変動を繰り返す国家の境界領域である奄美諸島の特質」という視点を評価したうえで，「変動する『境界』や『辺境』とする奄美諸島が，相対的に個性の強い異なる文化圏の交差地点であるとするならば，奄美諸島の特性は，そこを認識することから始め，相対的に境界地域とみられる地域の文化的自律性をどう捉えるかが重要な視点である」と述べている。

文化人類学の立場から，沖永良部島を＜境界上の島＞として位置付け，「異なる文化圏の交差地点」の文化的独自性とアイデンティティを研究しているのが，高橋孝代である。

＜沖永良部人＞と＜在日奄美（与論）二世＞のアイデンティティ

高橋孝代（沖永良部出身）と本山謙二（与論二世）は，アイデンティティそのものをテーマに報告した。彼らの諸論考，彼らとのこれまでの議論をもとに，その意味を考えてみる。高橋の報告からは，「薩摩（鹿児島）」「琉球（沖縄）」の＜境界上の島＞である沖永良部島民のアイデンティティがみえてくる。本山の報告からは，本土（鹿児島）で育った二世のアイデンティティがみえてくる。「本土」という言葉も気になるが…。

私たちは＜日本＞という社会の中で，自己認識をどのように形成していくのだろうか。別の視点からいえば，社会との＜違和感＞をいつ認識し，その＜違和感＞をどのように受け止めるのだろうか。自己認識は，他者認識でもある。

高橋は，進学のために東京に出てはじめて，＜沖永良部＞を意識したという。＜社会＞との違和感をはじめて認識したのだろう。島では，＜社会＞と違和感をもつことはほとんどない。沖永良部島から沖縄に進学した私も，そのときはじめて＜沖永良部＞を意識した。「コルシカ人は，フランス本土に出てはじめて，自分がコルシカ人であることを認識する」という。高橋も私も，それぞれ東京，沖縄に出て，はじめて＜沖永良部＞を意識した。＜社会＞との違和感をはじめてもったのである。

本山は，幼い頃から，自分たちの家族は周囲とは＜違う＞と感じていたという。本山は静岡生まれ，鹿児島育ち。両親は，与論島出身。両親だけの会話は，与論言葉である。両親はよく与論の郷土会に参加し，与論や沖縄の民謡・舞踊を，楽しそうに歌い踊った。本山は，そのような両親の姿を見ながら，育った。鹿児島という社会の中で育った本山が，「自分の家族は，周囲の家族とは何か違う」と，幼い頃から

感じていたことは理解できる。本土で暮らす「奄美」出身者たちの家庭に生まれた二世が感じる共通の感覚であろう。

問題は，この＜違和感＞をどう受けとめるかである。高橋も本山も，この＜違和感＞を肯定的に受けとめることから，自己認識をはじめる。簡単なようだが，そう単純ではない。

『奄美と開発』の中で，農民体質に関する大山麟五郎説を取り上げた。大山は，明治前期の黒糖自由売買運動の時代，「奄美初」の検事として活躍した岡程良の孫である。大山は学生時代，東京で開かれた鹿児島県学生会に参加したとき，しつように出身地をたずねられ，遂に「奄美」と答えたところ，薩摩弁で「奄美は鹿児島でなかでな」という一言が返ってきた。この苦悩が，「奄美」の歴史研究者として大成させるきっかけになったという。このような差別と無理解が，奄美諸島出身者に出身地を「ぼかす」という心情を植えつけた。

10年ほどまえ，私自身がある出来事をもって，「奄美」出身者が本土で「奄美」と簡単に言えないことを，痛感させられた。当時連載していた南日本新聞のコラムで，肯定的な意味で何度も「奄美人」という言葉を使ったところ，年配の現教師，元教師から「奄美人という言葉は使わないでほしい。複雑な気持ちになる」という抗議の投書があいついだ。「奄美」というよりも「奄美人」という言葉に抵抗があったともいえる。

高橋と本山は，それぞれ＜沖永良部人＞＜在日「奄美（与論）」二世＞と自己規定する。自分の身体感覚にぴったりあう言葉だからであろう。

高橋にとって，米国留学のときの体験が，アイデンティティ研究に入るきっかけになったという。90年代半ば，滞在していたサンフランシスコで，沖縄県人会による移民百年祭が開かれた。沖永良部島で育った高橋は，百年祭で披露される琉球民謡や琉球舞踊にとても親しみを感じた。と同時に，沖縄に親しみを感じつつも，「沖縄県人」にはなりきれない自分に気がついた。高橋は帰国後，母校（早大）の大学院で，文化人類学の立場から沖永良部島をテーマにアイデンティティ研究をはじめる。

高橋は今回の報告のもとになった論文「沖永良部島島民のアイデンティティと政治の歴史」（『沖縄文化研究』29号）の中で，次のように述べている。

> 沖永良部島の人々は，マジョリティにもマイノリティにもオーセンティックな意味ではなれない「境界人」であり，国民国家対マイノリティという構図におさまることができない。よって，そのような人々のアイデンティティを，国民国家という枠組みに基づくエスニシティ論で説明するには限界がある。沖永良部島は，「日本／沖縄」，「鹿児島／沖縄」，「奄美／沖縄」など重層的な境界にあり，人々は重層的かつ融合的なアイデンティティをもっている。

高橋によれば，沖永良部島民のアイデンティティは，「鹿児島（薩摩）／沖縄（琉球）」の権力のせめぎあいという大きな政治の歴史に深く関連している。永良部世之主を中心とする親族集団は，三山時代から琉球王国時代を経て薩摩藩直轄領であった近世の中期頃までその権力の中枢を占めた。しかし薩摩藩直轄領時代の後期になると，藩役人と沖永良部の女性の子孫である鹿児島系の人々へと権力が移行していった。現在でも沖縄系，鹿児島系を自称するこれらの人々は，祖先崇拝に支えられ出自によるアイデンティティを強く意識することが多い。

沖永良部島民600人のアンケート調査の結果が，興味深い。沖永良部島民の政治的アイデンティティは，分裂している。市町村合併にからむ質問で，「沖縄帰属」と回答した島民は53％，「鹿児島帰属」は47％である。これは沖永良部全体の数字であるが，知名町民の場合

は「沖縄帰属」63%，「鹿児島帰属」37%であり，和泊町民は「沖縄帰属」44%，「鹿児島帰属」56%である。薩摩藩の代官所が，現在の和泊町に置かれていたという「政治の歴史」が背景にある。

このアンケート結果は，先田光演（沖永良部郷土研究会長）が『奄美ニューズレター』12号で紹介している「沖永良部島の伝説分布図と構造図」と重なりあう。先田によると，沖永良部島における伝説の分布は重層的である。現在の知名町に重なる西部地区では，沖永良部島が世之主によって統一される以前の古層のアジ（豪族）伝説が語り継がれている。中部地区は，琉球北山王の二男といわれ，沖永良部島を統一した世之主にかかわる伝説が支配的である。世之主伝説は前の時代のアジ伝説も取り込んだ形で伝承されている。そして，現在の和泊町である東部地区では，西郷伝説が支配的である。西郷伝説は，近世後半の薩摩藩役人とのつながりが大きく影響している。

先田によれば，沖永良部島の伝説の分布は，西部地区のアジ伝説が古層となり，中部地区ではアジ伝説の上に中世の世之主伝説が重なり，東部地区ではさらに近世の西郷伝説がおおい被さるという，重層的な構造をもっているという。高橋が歴史的な流れとして報告した沖永良部島の「政治の歴史」が，現在の沖永良部島に伝説＝アイデンティティとして立体的に残されていることを示していて，興味深い。

沖永良部島民の政治的なアイデンティティには分裂がみられるが，文化的なアイデンティティは沖縄に対して強く親近感を感じているという一体性がみられる。アンケート結果によると，「沖縄の歌，踊りなどの芸能」に対する愛着や親近感については，94%（55%）の島民が「感じる」と回答している。「鹿児島の歌，踊りなどの芸能」に対しては35%（5%）の島民しか愛着や親近感を感じていない。この傾向は出自や知名町，和泊町関係なく，沖永良部島民全体に共通する。カッコ内は，「非常に感じる」と答えた島民のパーセントである。高橋には沖永良部島の芸能に関する論文「沖永良部島における『沖縄』芸能文化の受容と背景――近世末～近代の過程――」（『民俗芸能研究』第33号）もあるので，ぜひ読んでもらいたい。

本山の報告からは，二世にとって「芸能」がアイデンティティを確認する重要な要素であることがわかる。与論二世の本山は沖永良部二世の作家，干刈あがたに自分自身を重ねあわせる。「干刈あがた」は“光（干刈）は遠方（県）より”をもじってつけられたペンネーム。両親は沖永良部島の北海岸に面する小さな永嶺集落の出身。早大の学生時代に島を訪れたときのことを素材にした小説『入江の宴』は，芥川賞候補作となっている。島を訪れた主人公のユリは，父母の争いの言葉がいつも島言葉であったために，しばらくのあいだは，島に対する違和感をぬぐい去ることはできなかった。しかし，親戚たちが集まった「船迎（ヒナムケ）」の場で島唄を聴いていると，心のなかでたぎっていたものがどっと崩れあふれだした。血が泣いているような気がしながら，泣くことのこころよさに身をまかせてしまうユリ。「ユリ」は，干刈あがた自身のことである。自分の身体に流れている「島の血」を肯定的に認識した干刈は，島唄で使われる島言葉に惹かれ，多くの島唄の歌詞を採集しはじめるようになった。

本山は，加計呂麻二世の歌手，与論二世のイラストレーター，在日朝鮮人二世たちの言葉を紹介する。彼らは両親たちが話す母（国）語には当初，違和感をもつものの，やがて島唄や踊りなどの芸能からルーツに対するアイデンティティに目覚めていく。

また脱線的に話を進める。昨年九月，神戸と大阪から，沖永良部二世の二十代と三十代の女性が三線をもって島を訪れ，祖父母の敬老会の場で島唄を披露している。三十代の女性は，祖先の墓地を訪れて三線を弾き，自分の身体に島唄の「血」が流れていることを確認している。近頃，このような若者が増えている。

このように，ルーツの島にアイデンティティをもとめる若者が増えているのはなぜなのか，以前から気になっていることである。「自分は何者なのか」というアイデンティティをもとめて島に来るわけだが，都市生活の中で解消しきれない＜違和感＞を抱えているからなのであろうか。

小熊英二・上野陽子著『＜癒し＞のナショナリズム』を読むと，その答えがなんとなくわかるような気がしてきた。同書は，「新しい教科書をつくる会」の神奈川支部「史の会」への参与観察をもとに，現代日本の＜草の根ナショナリズム＞を分析している。まず同書の内容を紹介しておく。

「史の会」の構成員は，従来からの保守系ナショナリストである年長者と，アイデンティティの不安を抱えて集まった比較的若い世代という，いわば二層構造をとっている。後者は，会社員・専業主婦・学生などでいわゆる都市中産層であり，「史の会」の大部分を占めている。後者の特徴は，「普通の市民」を自称していることである。

それでは，その「普通」とは何か。彼ら自身も，明確に規定することができない。否定的な他者を＜普通ではないもの＞として排除するという消去法以外に，自分たちが「普通」であることを立証し，アイデンティティを保つ方法がないようである。彼らは，自分を「普通」であると立証してもらうことに，飢えている。

「戦中派」の参加者は，みずからの核として戦争体験に根ざした価値観をもっているので，天皇観においても戦争観においても，「伝統的な保守思想」を持ち続けている。アイデンティティの揺らぎはない。しかし，「戦中派」以外の参加者たちは，アイデンティティの核が定まらない不安を抱え，それを癒してくれる場を求めて「史の会」にやってくる。彼らの天皇観は，クールである。それが，アイデンティティの核となる様子はない。それは，戦後教育を受けた人々であるからだろう。

「新しい教科書をつくる会」といえば，これまでの教科書を自虐史観と否定し，「自由主義史観」を唱える人びとの集まりである。彼らは，中国・韓国・北朝鮮に激しい嫌悪を示し，国内では「サヨク」や「朝日」を非難する。そのことによって，「普通の市民」＝「日本人」としてのアイデンティティを確認できるのである。

「ふつうの市民」という言葉を社会運動のなかで広めたのは，ベ平連の旗揚げ役を担った小田実である。しかし，その「ふつう」は，「異質」なものを排除するものではなく，むしろ積極的に受け入れる言葉であった。小熊英二は，著書の中で，次のように言う。

> しかし「史の会」のメンバーたちがいう「普通の市民」とは，そのようなものではない。それは，つねに自分が「普通」であることを立証したいという不安におびえ，そのために＜普通でないもの＞を発見し，排除し続けてゆくことでアイデンティティを保とうとする人びとによって作られる共同体なのである。（中略）そして将来において，この本を読んでいるあなたが，＜普通でないもの＞として発見されてゆくことがありえないとは，誰にも保証できないのである。

これと対比するかたちで，本山の論考「人種・エスニシティ」（吉見俊哉編『カルチュラル・スタディーズ』）から干刈あがたの言葉を紹介しよう。「都市生活の小説」を書きながらも「漂泊感を意識」していた干刈は，次のように述べている。

> 私の両親は奄美出身者だが私は東京で生まれ育ち，小説も東京の人間関係を書くことが多い。そんな私に時に，奄美・沖縄と血がつながっているのになぜ沖縄を書かないのか，沖縄共同体の一員としての意識が薄いのではないか，と言われることがある。でも私はこう考える。私は故郷を離れざるを得

なかった者の子として，本土に生れ暮らしている。そして私の周囲は，農業を離れた者の二代目や，元武士のＸ代目や，故国から日本に連行された者の子孫や，そうした者の集合なのだ。それなら互いに歴史を負ったそれぞれがいま，隣人としてここに暮らしていることを大切にし，理解し合いつながり合い，互いがよりよく生きられる場所をつくっていくことも，自分の歴史や血を愛するということではないか。(「在日三世の『ごく普通の在日韓国人』)

干刈あがたのこの言葉を受けて，本山は次のように述べる。

このように干刈は，漂泊感という緊張関係のある言葉を使用し，琉球弧というエスニック・アイデンティティにこだわりながら，とりあえず「周辺」性を意識し，さらに「おんな・こども」，「流れ者」，離婚する女性の生活，「不登校」をめぐる問題などに，あくまでも生活に近い日常実践の部分から，ネットワークとしての「周辺」性のアイデンティティ政治へと，その作家活動を通じ，開いていったのである。この作家活動は，琉球弧と現在暮らす社会とのあいだを漂泊することへの肯定という志向性を持っている。それは移住先で育ち，生活した，絡まりあう経験のなか漂泊する世代にとって重要な道しるべを与えている。

ネットワークとしての「周辺」性のアイデンティティへと開いていく，という部分が重要である。そこからは，異質なものを含む多様な社会という認識が生れてくるからだ。「史の会」に集まり，「普通の市民」にアイデンティティをもとめる人々は，さまざまな「歴史を負ったそれぞれがいま，隣人としてここに暮らしていることを大切にし，理解し合いつながり合い，互いがよりよく生きられる場所をつくっていくことも，自分の歴史や血を愛するということ」という思考回路をもたない。彼らは，具体的な＜自分の歴史＞をもとうとせず，抽象的な＜国民の歴史＞から思考をはじめる。そこから見えてくるものは，これまでの歴史教育は＜自虐史観＞であり，否定されるべき他者としての中国・韓国・北朝鮮なのであろう。彼らにとってアイデンティティを保つためには，否定し排除するための他者が必要である。昨年のイラク人質事件の際，ヒステリックに「自己責任」を叫んだ「国民」は，人質となった人々を＜普通でないもの＞として「発見」することによって，自分たちが＜普通の市民＞であることを確認していたのではないか。

干刈あがたは，その作家活動が期待されたが，1992年，49歳の若さで亡くなった。干刈は文庫本『樹下の家族／島唄』の「あとがき」に，次のように書いていた。「私には沖永良部島に，伯母から譲られた少しの土地があるが，そこからは東シナ海が見える。小説書きに疲れると，眠りに引き込まれるように，東シナ海に沈む夕日を思い出す。そんな時は，“島に行こうかな”ではなくて，“島に帰ろうかな”と思う」。干刈はこのあとがきを書いたあと，“島に帰る”機会はなかった。

おわりに

それぞれのルーツの島にアイデンティティをもとめる若者たちとの議論で気づいたことは，ルーツを確認することは「終わり」ではなく，＜日本＞という社会を再認識するための「始まり」であるということだ。そのような認識回路からは，＜日本＞という社会が，さまざまな歴史と文化を背負った人々が住む社会であることがみえてくるはずだ。

「アイデンティティと歴史認識」は，切り離せない。問われるのは，他者を認めるアイデンティティによって形成される「歴史認識」なのか，他者を排除するアイデンティティによって形成される「歴史認識」なのか，だと思う。